

2018年度上期 決算説明会 質疑応答要旨

お断り：この要旨は決算説明会での質疑をご参考として掲載するものであり、一部補足を含め簡潔にまとめさせていただきました。ご了承ください。

記

1. 開催日 : 2018年11月13日(火)
2. 場所 : 本社会議室
3. 質疑応答内容:

<Q1>

資料 P.16) 2020年度中期経営計画の目標について、海外売上高が110億円とあるが地域別の目標があるのか教えて欲しい。

<A1>

海外廃棄物について明確な地域別目標は無い。今回、英国とタイにおいて受注し、受注高は英国の方がスコープが広範で大きい。このように案件のスコープにより地域別の売上高は変動すると見ている。

海外水処理については2020年度売上高55億円を目標とし、ベトナムの当社現地法人であるKESVを拠点として東南アジア、特にインドシナ半島を中心に展開していきたいと考えている。ODA案件は、今後カンボジア、ミャンマーにシフトしていくと見ており、現地パートナーと共に注力していく。

<Q2>

資料 P.21、22) IKEとの統合について、両社の強みがどのように活かせるのか教えて欲しい。

<A2>

両社の強みとしては、IKEと当社ではあまり相互に被らない、補完しあえる要素が強いと認識している。機種においては、IKEの保有しているストーカ炉と当社保有の流動床式での補完、既納施設のO&Mに強みを持つIKEと、DBO案件の受注を継続している当社とのノウハウ面での補完等、相互補完の効果は大きいと考えている。

<Q3>

資料 P.21、22) IKEとの統合による海外関連、新規分野の取組みについての具体的なイメージを教えてください。

<A3>

IKEのストーカ炉は産業廃棄物分野でも実績があり、一般廃棄物と産業廃棄物の垣根が無い海外案件において大きな可能性がある。

また、もみ殻等農業残渣の利活用等に係る技術も保有しており、新たなビジネスにつなげられればと期待している。

<Q4>

資料 P.26) 新型（攪拌式）凍結乾燥機の商品化に向けた開発を加速とあるが、具体的に教えてほしい。
また高付加価値食品メーカー向けとあるが、市場規模はどの程度と考えているのか？

<A4>

凍結乾燥とは、圧力を下げて真空状態とし、低温で新鮮なまま乾燥できる技術である。素材の持つ良いところを損なわず、あるいは食品の風味等を残すことができ、その意味で高付加価値食品メーカーがターゲットである。

当社が長年取り組んできた攪拌式真空乾燥技術をこれに取り入れることで、凍結乾燥に要する時間の大幅な短縮、加えて設置スペースの縮小が期待できる。

市場規模等も併行して調査しながら開発を進めており、明確には申し上げられないが、当社の新型（攪拌式）凍結乾燥機のターゲットとしては、数億円レベルではないかと考えている。

<Q5>

資料 P.29) 海外廃棄物は英国を足掛かりに、欧州全体を視野に入れていくことは考えているのか？

<A5>

欧州全体を視野に入れることも考えている。ドイツやフランス等、既に施設が整備されている国もあるが、東欧等にはチャンスがあると見ている。

<Q6>

資料 P.32) 汚泥燃料化＋発電事業について、神戸製鋼 Gr での展開後には、全国各地の石炭火力発電への展開を図るのか？ また実証のスケジュールについても教えて欲しい。

<A6>

燃料の利用先については、石炭火力発電所のみならず、産業用のボイラ等も考えており、様々な利用先での利用に耐える燃料化技術の確立を目指す。19 年度に実証設備を建設して汚泥燃料の製造技術を確認するとともに、既存のボイラでの汚泥燃料の燃焼性等の確認を完了させたいと考えている。

これら実証を通じ技術を確認し、全国展開を図りたい。

<Q7>

資料 P.34) 水素関連ビジネスについて、フォークリフト等での活用に特に重点を置いているのか？

既に実用レベルでフォークリフト等へ納入した実績はあるのか？

<A7>

フォークリフト等は、走行距離をそれほど気にする必要が無く、活用しやすいと認識している。まだ実用レベルでの販売には至っていないが、実験レベルでは納入している。

また現在注目されているのは、太陽光や風力発電で得られた電力で水素を製造・貯蔵し、各自治体や工場で災害が発生し電気が止まった時に、この水素を燃料電池の燃料として発電するといった BCP 用としての需要が伸びている。

<Q8>

資料 P.37) 新品質保証体制の構築完了後、6 月以降の具体的な運用状況は？

<A8>

品質保証機能を独立させ、当社監査役も含めた品質監査を行い、品質管理のモニタリングを行っている。その成果を品質・環境監視委員会に報告、全社で共有すると共に、改善点等についても協議している。

<Q9>

資料 P.37) 今回の不適切事案による事業・業績への影響は無いとの従来からの認識に変わりはないか？

<A9>

認識に変わりはない。

ただ、神戸製鋼 Gr 全体が品質面での建て直し途上であることについて、お客様は重々ご承知されている。個別のお客様から従来にも増して、お客様との約束を確かに守っているか、という観点から厳しい目を向けられていると感じているが、これは当然のことと受け止めており、しっかりとした対応を継続していく。

本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社の現在把握している情報、及び合理的であると判断する前提に基づいており、実際の業績等は様々な要因により異なる可能性があります。

以 上